

実験室を飛び出して中国の山奥で心理学研究

研究者所属・職名：
九州大学・基幹教育院・准教授

ふりがな やまだ ゆうき

氏名：山田 祐樹

主な採択課題：

- [挑戦的萌芽研究「気持ち悪さの認知的メカニズム」\(2014-2016\)](#)
- [基盤研究\(C\)「気持ち悪さの認知多層科学」\(2018-2020\)](#)
- [新学術領域研究\(研究領域提案型\)「身体化された情動の文化化を探る—中国雲南省少数民族の身体的心性—」\(2018-2019\)](#)

分野：実験心理学、認知科学

キーワード：実験心理学、身体性、感情、フィールドワーク、多様性

課題

● なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）

心理学が研究対象としている「こころ」というものは、その人の身体の状態や認識とも深く関連している。当研究室ではこの「身体化された認知」と呼ばれるトピックにかかわる研究を行ってきた。例えば身体の「上」と「下」には「ポジティブ」「ネガティブ」感情がそれぞれリンクしている。また、密集したぶつぶつが気持ち悪く見えるトライポフォビアは、自分の皮膚がそんな状態になることを避ける機能だと考えられ始めている。これまでの研究は真っ暗にした実験室で行ってきたが、知見が一般化できるのか疑問であった。都市部とは異なる生活を送っている人々も同様なのか調べたい。そこで中国へ行くことにした。

● 研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

心理学実験の多くは、参加者に何か対象（刺激）を見せて反応を得る。特に、感情についての「身体化された認知」の実験では文字を見せることが多い。しかし研究対象としたハニ族の人々には文字がないし中国語も通じない。また、入国管理上の問題で特殊な実験機器を持ち込むのも難しかった。そこで、紙と鉛筆を用いながらハニ語通訳者と一緒に実験をする方法を考案するのに苦労した。だが、何より一番苦労したのはハニ族の住む山奥に入っていくことだった。



図1 行ってきたところ

実験室を飛び出して中国の山奥で心理学研究

研究成果

● どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

まず我々は22カ国で行った調査から、「上」「下」と「ポジティブ」「ネガティブ」との関連がそれらのどの言語においても頑健に見られることに注目した。この知見が一般化可能かどうかを調べるため、ハニ族とタイ族という2つの少数民族を対象に選んだ。1000年もの間、貧しいハニ族が山の上に居住地を追いやられてきた歴史から、この地域では上がネガティブという通常とは逆の関連が形成されているのではないかと予想したのである。だが、前ページに記したような苦勞の末に集めたデータを解析したところ、彼らの上下と感情の関連は普通——つまり上がポジティブであった。したがって今のところ、上下と感情の関連については、辺境地に住み文字も持たず特殊な歴史的背景を持つ少数民族にも一般化できるほど頑健であると結論付けられる。

さらに我々は、トライポフォビアが生活環境の都市化と関連して生じるとの仮説を検証するため、同じく中国南部の山奥にて少数民族に集合体画像を見せて、その気持ち悪さを評価してもらう実験も行った。すると、山岳地域に住む少数民族では都市部の人々のように強いトライポフォビアが生じないという結果を得た。この結果は都市化説を支持し、都市型生活による(皮膚)感染嫌悪の高まりがトライポフォビアの基礎にある可能性を示唆する。

これらの研究は、実験室内での実験とは異なるエビデンスと視座を我々に与えてくれる。たしかにデータ収集に苦勞は伴うが、このような苦勞であれば買ってでもするべきであると実感した。



図2 実験場所と実験風景

今後の展望

● 今後の展望・期待される効果

本研究で対象としたのはあくまで中国南部の一部の少数民族である。だが世界にはまだまだ心理学研究への参加機会に乏しい民族が多く存在する。例えばアマゾンや東南アジアでの研究はさらに進めていくつもりである。また、南極や高高度地域や深海での実験心理学的知見は明らかに不足しているため、そうした特殊環境での研究も行いたい。そこで得られる成果や知見は、きたる宇宙進出の際にヒトのところが受ける影響についての推測・対策にとって極めて重要であると考えている。



図3 宇宙で心理！